

学修時間の確保に関する教員の意識調査

教育研究推進プロジェクトチーム

The opinion poll of the faculties about ensuring time for learning

The project team for the promotion of education and research

要約

学生の学修時間への現状認識および学修時間を確保するための取り組みの実態について、本学教員を対象にアンケートによる意識調査を実施した。教員が想定している学修時間は、講義・演習科目（2単位）では30分～1時間、実習科目（1単位）では1～2時間をもっとも多く、大学設置基準および「履修の手引」が想定している自主学習時間（講義・演習科目1単位2時間、実習科目1単位1時間）との乖離が認められた。学生の学修時間が不十分であると考えている教員は44.0%、大学として組織的な取組が必要であると挙げている教員は50.0%にとどまり、一律に、時間数だけを強制的に義務付けるような取組はすべきではないという意見が多くみられた。学修時間を確保するための効果的な取り組みに関する自由記述の回答より、①学習の動機づけ、②授業への学生の参加促進、③具体的な学習方法の指示、④ICTの活用、⑤グループ学習の活用、⑥教材の工夫、⑦学習成果の可視化、⑧成績評価への反映、⑨学生への丁寧なフィードバック、⑩各種情報の提供が抽出された。

キーワード：学修時間、予習・復習、成績評価、授業改善、主体的学習

緒言

大学教育において、生涯学び続け、主体的に考える力を育成することが求められている。しかし、「全国大学生調査2007年」(CRUMP)¹⁾によれば、わが国の学生の1日の学修時間は、4.6時間（授業、実験、授業に関する学修、卒論を含む）で、諸外国に比べて少なく、一定の学修時間を前提としている単位制の形骸化が指摘されている。

2012年8月に発表された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」²⁾において、学士課程の質的転換（3つの方針の明確化、単位制の実質化）が提言され、学修時間の確保はすべての大学教育において必須であり、かつ質的転換への好循環に向かう始点（第1歩）として位置付けられている。また、学修時間の確保は、わが国の大学教育の質保証に係る国際的な信頼の指標として不可欠であるとも言われている。

主体的に考える力を育成するためには、問題解決型の能動的学習（アクティブラーニング）、eラーニングなどITの活用、体験活動、TA（teaching assistant）などの導入が必要である。アクティブラーニングでは、事前の準備（資料の下調べ、読書、思考、学生同士の議論など）、授業の受講（教員の直接指導、教員と学生・学生同士の対話、意志疎通な

ど）、事後の展開（授業内容の確認、理解の深化・探求、さらなる討論・対話）が不可欠となる。大学教員は、それぞれの授業において学生の授業時間外の学修時間の確保に向けた授業改善に取り組むことが求められている。

そこで、現状において学生の学修時間について、本学の教員がどのように認識しており、学生の学修時間を確保するためにどのように取り組んでいるかということの実態を明らかにし、今後の各教員の取り組みの参考資料とすることを目的として、本調査を実施した。

方法

1. 対象者

山口県立大学の教員（助手を除く）100人を対象にアンケート調査を実施した。

2. 調査の概要

本調査の調査票の表題は、「学修時間の確保に関する教員の意識調査」である。調査票は、教育研究推進プロジェクトチーム企画会議において検討され、各部局からの意見を取り入れて作成した。教育研究推進プロジェクトチームは、本学の教育の質保証と研究の活性化について検討、企画および分析を

行うために、教育研究推進室のもとに組織され、各
部局から選出された11名で構成されている。

調査票の内容は、本学の教員が、現状において学
生の学修時間についてどのように意識しており、ど
のように取り組んでいるかということの実態を明ら
かにすることを目的として、以下の構成とした。

- (1) 基本属性（性別、年齢、所属部局、職位、担
当授業科目数）
- (2) 授業の受講以外に想定している一科目当
たりの学修時間（講義科目、演習科目、実習科目）
- (3) 学生の学修時間の現状に対する問題意識
- (4) 授業の予習・復習と授業運営
- (5) 学生の学修時間を増やすために行っている方
策（意識、シラバス、予習・復習、主体的学
習の促進、グループ学習の促進）

本調査で使用する「学修時間」は、授業時間、授
業に直結した予習・復習の時間、授業に直結しない
自主的学習時間、自主的な学習グループ活動の時間、
ボランティアなど課外活動の時間など、幅広くとら
えたものの合計時間とした。「学修時間」の用語は、
中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学
教育の質的転換に向けて」²⁾で使用されている用
語に従った。

3. 調査の実施

調査票は、2012年10月11日に各教員に配布し、10
月19日を期限として、教育研究推進室への提出によ
り回収した。調査票は、無記名による回答とし、調
査結果の公表においては、数値化されるものはすべ
て統計処理を行い、自由記述については、個人が特
定されないよう配慮する旨を調査票に明記した。

結果

1. 基本属性

調査票の回答率は、50.0%（100人中50人が回答）
であった。回答者の性別は、女性が52.0%、男性が
42.0%、無回答が6.0%であった。年齢は、39歳以下
が14.0%、40歳代が30.0%、50歳代が44.0%、60歳代
が12.0%で、40歳代と50歳代が74.0%を占めていた。

職位は、助教が4.0%、講師が24.0%、准教授が
24.0%、教授が48.0%で、約半数が教授であった。
担当授業科目数は、1～5科目/年が12.0%、6～
10科目/年が24.0%、11～15科目/年が36.0%、16
～20科目/年が26.0%、20科目以上が0.0%、無回
答が2.0%で、11～15科目/年がもっとも多かった。
担当授業科目数と職位との関係は、1～5科目/年
では教授が50.0%、准教授が0.0%、講師が33.3%、
助教が16.7%、6～10科目/年では教授が33.3%、
准教授が25.0%、講師が33.3%、助教が8.3%、11～
15科目/年では教授が44.4%、准教授が38.9%、講

師が16.7%、助教が0.0%、16～20科目/年では教
授が69.2%、准教授が15.4%、講師が15.4%、助教
が0.0%であり、教授の担当授業科目数が多くなっ
ていた。

2. 授業の受講以外に想定している学修時間

教員が、授業の受講以外に想定している1科目当
たり学修時間は、講義科目では30分～1時間
（40.0%）がもっとも多く、次いで1～2時間
（38.0%）、30分以内（10.0%）であり、50.0%の教
員が1時間以内と回答していた。演習科目では30分
～1時間（36.0%）もっとも多く、以下は30分以内
から3時間以上まで広く分布していた。実習科目で
は、1～2時間が32.0%でもっとも多く、次いで2
～3時間（16.0%）、3時間以上（16.0%）であり、
講義科目と演習科目に比べて、長時間の学修時間を
想定している教員が多かった。（表1）

表1 授業の受講以外に想定している学修時間

	講義科目	演習科目	実習科目
30分以内	10.0%	18.0%	2.0%
30分～1時間	40.0%	36.0%	12.0%
1～2時間	38.0%	16.0%	32.0%
2～3時間	4.0%	14.0%	16.0%
3時間以上	8.0%	16.0%	16.0%
無回答	0.0%	0.0%	22.0%

3. 学生の学修時間の現状に対する教員の問題意識

「学生の学修時間は十分だと思いますか」という
質問に対し、「どちらともいえない」と回答した教
員（44.0%）がもっとも多く、「強くそう思う」ま
たは「そう思う」と回答した教員は12.0%、「そう
思わない」または「まったくそう思わない」と回答
した教員は44.0%であった。（表2）「どちらともい
えない」という回答が多かった理由として、自由記
述には、学生により個人差があること、授業科目に
よる予習・復習の比重が違うこと、授業以外の学修
時間を把握できていないことが挙げられていた。

年齢分布でみると、50～59歳の教員が他の年代
に比べて、学生の学修時間が不十分であると回答し
ている割合がやや高くなっていった。

「大学として組織的に学生の学修時間を増やすた
めの取組が必要だと思いますか」という質問に対
しては、50.0%の教員が「強くそう思う」または「そ
う思う」と回答し、42.0%の教員が「どちらともい
えない」と回答した。（表3）学生の学修時間が不
十分であると考えている教員の59.1%が、どちらと
もいえないと考えている教員の45.5%が大学として
組織的な取組が必要であると回答し、学生の学修時

表2 学生の学修時間

		教員の年齢分布				合計
		39歳以下	40～49歳	50～59歳	60歳以上	
学生の学修時間は十分だと思う	強くそう思う	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	そう思う	2.0%	6.0%	2.0%	2.0%	12.0%
	どちらともいえない	6.0%	12.0%	18.0%	8.0%	44.0%
	そう思わない	4.0%	12.0%	20.0%	2.0%	38.0%
	まったくそう思わない	2.0%	0.0%	4.0%	0.0%	6.0%
合計		14.0%	30.0%	44.0%	12.0%	100.0%

表3 学生の学修時間への問題意識と大学の組織的な取組の必要性

		大学として組織的な取組の必要性					合計
		強く そう思う	そう思う	どちらとも いえない	そう 思わない	まったくそ う思わない	
学生の学修時間は十分だと思う	強くそう思う	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	そう思う	4.0%	0.0%	8.0%	0.0%	0.0%	12.0%
	どちらともいえない	0.0%	20.0%	22.0%	2.0%	0.0%	44.0%
	そう思わない	2.0%	20.0%	10.0%	6.0%	0.0%	38.0%
	まったくそう思わない	2.0%	2.0%	2.0%	0.0%	0.0%	6.0%
合計		8.0%	42.0%	42.0%	8.0%	0.0%	100.0%

表4 予習・復習を前提とした授業運営

	予習	復習
いつもそうしている	6.0%	16.0%
そうしていることが多い	42.0%	48.0%
どちらともいえない	26.0%	20.0%
あまりしていない	24.0%	12.0%
まったくしていない	2.0%	2.0%
無回答	0.0%	2.0%

が多い」と回答した教員は、予習については48.0%、復習については64.0%であり、復習を重視している教員が多いことがうかがえた。(表4)

自由記述では、授業科目の性質や学習内容により予習を重視する場合と復習を重視する場合があります、一律には決められないという意見が多かった。復習については、課題、小テスト、期末試験を課している場合が多いようであった。

「予習または復習をしていない学生も参加できるような授業の構成にしていますか」という質問に対して、予習については74.0%、復習については68.0%の教員が「いつもそうしている」または「そうしている」と回答した。予習または復習を前提に授業を構成している場合であっても、予習については58.3%が、復習については75.0%が、予習または復習をしてこない学生でも授業に参加できるような構成にしていると回答した。(表5、表6)

予習・復習をしない学生に対する配慮について、自由記述では、「予習をしてこない学生を参加させないということとはできない」という意見がある一方で、「予習・復習をしてこない学生を救済する必要があるのか」という意見もあった。

間が不十分であると考えている教員が、大学としての組織的な取組が必要であると考えた傾向がうかがえた。

学修時間を増やすための大学としての組織的な取組として、自由記述では、一律に、時間数だけを強制的に義務付けるような取組はすべきではないという意見が多かった。一方、主体的な学習態度、学びを深めることにつながる指導、学習意欲の喚起などにつながる授業改善や成績評価方法について、教員のFD (faculty development) の必要性を訴える意見が多かった。

4. 授業の予習・復習と授業運営

「学生が予習または復習してくることを前提に授業運営を構成していますか」という質問に対して、「いつもそうしている」または「そうしていること

5. 学生の学修時間を増やすために行っている方策

学修時間を増やす方策については、60.0%の教員が意識しており、具体的な方策を実施していると回

表5 予習をしていない学生への配慮

		予習をしてこない学生の授業参加への配慮					合計
		いつもそう している	そうしている ことが多い	どちらとも いえない	あまりして いない	まったく していない	
予習を前提し た授業運営	いつもそうしている	2.0%	2.0%	2.0%	0.0%	0.0%	6.0%
	そうしていることが多い	4.0%	20.0%	14.0%	4.0%	0.0%	42.0%
	どちらともいえない	12.0%	10.0%	4.0%	0.0%	0.0%	26.0%
	あまりしていない	16.0%	6.0%	2.0%	0.0%	0.0%	24.0%
	まったくしていない	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%
合計		36.0%	38.0%	22.0%	4.0%	0.0%	100.0%

表6 復習をしていない学生への配慮

		復習をしていない学生の授業参加への配慮					合計
		いつもそう している	そうしている ことが多い	どちらとも いえない	あまりして いない	まったく していない	
復習を前提し た授業運営	いつもそうしている	6.0%	6.0%	4.0%	0.0%	0.0%	16.0%
	そうしていることが多い	6.0%	24.0%	14.0%	4.0%	0.0%	48.0%
	どちらともいえない	6.0%	8.0%	4.0%	2.0%	0.0%	20.0%
	あまりしていない	6.0%	4.0%	2.0%	0.0%	0.0%	12.0%
	まったくしていない	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%
合計		26.0%	42.0%	24.0%	6.0%	0.0%	98.0%
無回答							2.0%

答した。職位別にみると、助教が50.0%、講師が75.0%、准教授が75.0%、教授が45.8%であった。担当授業科目数別にみると、1～5科目/年が66.7%、6～10科目/年が66.7%、11～15科目/年が55.6%、16～20科目/年が61.5%であった。(表7)

シラバスには、86.0%の教員が自主学習課題を記載していると回答したが、学修時間の目安を記載していると回答した教員は2.0%だった。

予習・復習については、60.0%の教員が毎回の授業で課題を課しており、そのうち43.0%の教員が指示した課題をやってきたかどうか、授業中に小テストなどをして成績評価に加えていると回答した。また、60.0%の教員が指示した課題について、レポート、ノート、ポートフォリオなどを提出させて成績評価には加えていると回答した。予習・復習の課題について、86.7%の教員が小テスト、レポート、ノート、ポートフォリオのいずれかの方法で成績評価に反映させていた。

学生の主体的学習の促進については、YPUポータルを通じて学生の書き込みに積極的に応じていると回答した教員は30.0%であった。職位別にみると、助教が50.0%、講師が16.7%、准教授が50.0%、教授が25.0%であった。担当授業科目数別にみると、1～5科目/年が16.7%、6～10科目/年が8.3%、

11～15科目/年が38.9%、16～20科目/年が46.2%であった。予習・復習にとどまらず、興味・関心を広げるための自主学習課題を提供していると回答した教員は30.0%であった。職位別にみると、助教が50.0%、講師が25.0%、准教授が33.3%、教授が29.2%であった。担当授業科目数別にみると、1～5科目/年が33.3%、6～10科目/年が33.3%、11～15科目/年が22.2%、16～20科目/年が38.5%であった。

グループ学習の促進については、グループで調べるなど、学生同士の授業時間外の活動を促進していると回答した教員は60.0%であった。職位別にみると、助教が100.0%、講師が83.3%、准教授が58.3%、教授が45.8%であった。担当授業科目数別にみると、1～5科目/年が66.7%、6～10科目/年が66.7%、11～15科目/年が61.1%、16～20科目/年が46.2%であった。学生のグループ活動に、教員も積極的に関与し、自主的活動を支援していると回答した教員は30.0%であった。職位別にみると、助教が50.0%、講師が33.3%、准教授が41.7%、教授が25.0%であった。担当授業科目数別にみると、1～5科目/年が16.7%、6～10科目/年が66.7%、11～15科目/年が22.2%、16～20科目/年が23.1%であった。

その他、本学の教員が実施している方策として、

表7 学生の学修時間を増やすために行っている方策

区分	質問	割合
意識	学修時間を増やす方策について、特に意識したことはない	8.0%
	学修時間を増やす方策について、意識はしているが、具体的なことは行っていない	24.0%
	学修時間を増やす方策について、意識はしており、具体的な方策を実施している	60.0%
シラバス	シラバスに自主学習課題を記載している	86.0%
	シラバスに自主学習課題を行うのに必要な時間の目安を記載している	2.0%
授業の予習・復習	毎回の授業で、予習・復習をするよう口頭で促しているが、課題は課していない	28.0%
	毎回の授業で、予習・復習に関する課題を課している	60.0%
	指示した課題をやってきたかどうか、確認していない	2.0%
	指示した課題をやってきたかどうか、授業中にノートを見るなどして確認しているが、成績評価には加えていない	8.0%
	指示した課題をやってきたかどうか、授業中に小テストなどをして成績評価に加えている	24.0%
	指示した課題について、レポート、ノート、ポートフォリオなどを提出させているが、成績評価には加えていない	6.0%
	指示した課題について、レポート、ノート、ポートフォリオなどを提出させて成績評価には加えている	38.0%
主体的学習の促進	オフィスアワーを提示している	74.0%
	YPUポータルを通じて学生の書き込みに積極的に応じている	30.0%
	YPUポータル、「Moodle（ムードル）」などICTを活用した自主学習の支援を行っている	14.0%
	予習・復習にとどまらず、興味・関心を広げるため自主学習課題を提供している	30.0%
グループ学習の促進	グループで調べるなど、学生同士の授業時間外の活動を促進している	60.0%
	学生が自主的なグループ活動を行う場所・時間を提供している	22.0%
	学生のグループ活動に、教員も積極的に関与し、自主的活動を支援している	30.0%
	グループ活動の成果について、振り返りの時間を持つよう指導している	18.0%

表8 学修時間を増やすのに効果をあげている工夫

学習の動機づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・今やっていることが社会でどのようなときに役立つかを具体的に示す。 ・外国語で日記をつける。 ・海外のニュースや話題について、短い評論を書かせる。 ・地域の現場で活躍するリーダーや、第一線のアーティスト、異文化を生きる人などを教室やゼミ室に招いて、講義あるいはワークショップを学生に体験させる。 ・地域または外国の施設や実践現場を見学する機会を設ける。 ・講義と実習の関係、つながりを強く意識させる。
授業への学生の参加促進	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲のある学生に、授業を進行させる。 ・授業時に学生をランダムにあてて答えさせる。 ・演習において、担当者以外にもレジュメを作成させる。
具体的な学習方法の指示	<ul style="list-style-type: none"> ・授業テーマに即した課題を提示する。 ・自宅での学習課題のレポートを提出させる。 ・参考文献、参考図書を紹介する。 ・指定図書を示し、それについてのレポートを発表させる。 ・文献の探し方や利用方法を丁寧に指導する。 ・演習室、図書館の活用を促進する。 ・問題集を選定し、参考書として購入してもらい、高校のときと同じようなスタイルで学習できるようにする。 ・章末問題を全員に課し、その内容も含めて中間テストを2-3回実施する。その際に、必ず解答のポイントを配布し、正しい答えが確認できるようにする。 ・中間・期末とも試験の前に「予想問題」を配布し、重要なポイントを学習できるようにする。 ・ゼミ論作成過程では、各自の調査実施計画や論文作成計画・スケジュールを立案させ、課外における作業課題の実施を含めて進行管理する。
ICTの活用	<ul style="list-style-type: none"> ・Moodleで教師と学生、学生間で議論ができる環境をつくる。
グループ活動の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・時間内にグループ活動での課題を行わせ、できていない部分を時間外でさせる。 ・学習したことを発表させ、学生間でディスカッションさせる。
教材の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・配布資料に、課題欄を設け、自主的に考える材料としている。 ・ワークシートを活用する。 ・ワークシートを授業のふりかえりに活用している。 ・予習・復習の教材
学習成果の可視化	<ul style="list-style-type: none"> ・ポートフォリオを活用する。 ・小テストの結果を成績に反映する。
成績評価への反映	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を与え、これを確認又は提出させ、成績に反映させる。
学生へのフィードバック	<ul style="list-style-type: none"> ・コメントボードに記載を求めている。 ・個別指導の機会を提供する。
情報提供	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア実践や研修など、学生のニーズに応じた体験活動の情報を提供する。

自由記述を整理したものを以下に示す。

- ・グループ活動の活用：プレゼンテーション、ピアレビュー評価など
- ・ワークシートの活用：具体的な学習課題の提示、振り返りシートによる課題の自己設定など
- ・丁寧なフィードバック：個別の質問、YPUポータルによる質問への応答、コメントカードによる質問・感想への応答、提出物へのコメント返却、個別指導など
- ・学習の確認：小テスト、前回の授業の学習内容について発問と回答など
- ・学習資料の提供：YPUポータルへの授業スライド掲載など

学修時間を増やすのに効果をあげている工夫として記載された自由記述を整理したものを示す。(表8)

考察

1. 1回の授業当たりの自主学修時間

大学設置基準が想定している学修時間は、1単位＝45時間＝(授業1時間＋関連する学習2時間)×15週となっている。本学の「履修の手引」では、講義・演習科目は1単位を15時間の授業と自主学修時間30時間、実験・実習・実技科目は1単位を30時間の授業と自主学修時間15時間としている。これに従えば、講義・演習科目(2単位)の1回の授業当たりの自主学修時間は4時間となり、実習科目(1単位)では1時間になる。しかし、今回の調査結果では、講義・演習科目の自主学修時間は約半数の教員が1時間以内の学修時間を想定し、一方実習科目では半数以上の教員が1時間以上を想定していることから、大学設置基準および「履修の手引」が想定している自主学修時間と本学の教員が想定している自主学修時間の間には乖離があることが明らかになった。

2. 学生の学修時間の現状に対する問題意識

学生の学修時間が不十分であり、大学としての組織的な取組が必要と考える教員は44.0%にとどまり、それと同数の教員が「どちらともいえないと考えていた。この理由として、学生により個人差があること、授業科目による予習・復習の比重が違うこと、授業以外の学修時間を把握できていないことが、自由記述からうかがわれたが、現行カリキュラムにおける学生の履修状況において1つの授業科目に裂くことができる学修時間に対する教員の認識と大学設置基準が想定している学修時間の乖離も影響していると考えられる。

現状のカリキュラムと学生の履修状況を考えてみると、すべての授業科目に一律に学修時間を設定すると、学生に過剰な負担を強いることになる可能性が

ある。これを回避し、適切な学修時間を設定するためには、関連する授業科目を担当する教員間の連携による教育課程の体系化、実行可能で効果的な学習プログラムの開発に向けた大学全体での組織的な取り組み、シラバスの充実による自主学習の促進などが必要となる。これを実現するためには、教員間の共通認識を形成し、個々の教員のスキルを向上させるためのFDの実施が不可欠である。

3. 授業の予習・復習と授業運営

予習を前提にした授業運営を行っている教員は48.0%であるのに対し、復習を前提にした授業運営を行っている教員は64.0%であり、本学では復習を重視している教員が多いことがうかがえた。また、予習・復習を前提にしている場合であっても、予習については58.3%が、復習については65.6%が、予習・復習をしてこない学生も授業に参加できるように配慮していることが明らかになった。

4. 学生の学修時間を増やすために行っている方策

60.0%の教員が、予習・復習に関する課題を課しており、そのうち86.7%の教員がその成果を小テスト、レポート、ポートフォリオなどで確認し、成績評価に反映していることが明らかになった。また、主体的学習の促進、グループ学習の促進についても、多くの教員が積極的に関与している実態が明らかになった。職位別にみると、講師と准教授の教員がより積極的であり、積極的な教授の割合はやや低くなっていた。担当授業科目数別にみると、16～20科目を担当している教員で積極的な教員の割合が多いことから、担当授業科目数の多さが、主体的学習の促進、グループ学習の促進に積極的になれない理由ではないことがうかがえた。

学修時間を増やすのに効果を上げている工夫として記載された自由記述の分析から、①学習の動機づけ、②授業への学生の参加促進、③具体的な学習方法の指示、④ICTの活用、⑤グループ学習の活用、⑥教材の工夫、⑦学習成果の可視化、⑧成績評価への反映、⑨学生への丁寧なフィードバック、⑩各種情報の提供が抽出された。

結語

今回の調査により、本学の教員は、現在の学生の学修時間が一概に不足していると考えているわけではなく、大学設置基準および「履修の手引」が想定している学修時間に基づいて、一律に強制するべきではないと考えていることが明らかになった。適切な学修時間の設定は、個々の教員の裁量に任せるのではなく、カリキュラムと学生の履修状況の実態に即したものにするために、今後は関連する授業科目

の担当者の連携を強化し、主体的学習を促す指導方法に関するFDを実施することが不可欠である。

謝辞

調査にご協力いただいた山口県立大学教員の皆様、データ入力にご協力いただいた教育研究推進室事務補助員河村美幸氏に感謝いたします。

教育研究推進プロジェクトチーム構成員

教育研究推進室長	長坂 祐二
国際文化学科教授	井竿 富雄
文化創造学科教授	安光 裕子
社会福祉学科教授	正司 明美
看護学科准教授	丹 佳子
栄養学科講師	山崎あかね
共通教育機構准教授	今村 主税
附属地域共生センター教授	前田 哲男
情報化推進室准教授	吉永 敦征
教育研究推進室主査	中島 玲子
教育研究推進室主事	三宅 早苗

文献

1. 「全国学生調査2007年」東京大学・大学経営政策センター (CRUMP) <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crum p/cat77/cat82/>
2. 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」中央教育審議会答申、2012年8月28日

学修時間の確保に関する教員の意識調査票

1. 基本属性

当てはまるものに☑をしてください。

- (1) 性別 男性、 女性
- (2) 年齢 39歳以下、 40～49歳、 50～59歳、 60歳以上
- (3) 所属部局 国際文化学部、 社会福祉学部、 看護栄養学部、 共通教育機構
附属地域共生センター、 情報化推進室 別科助産専攻
(管理職で部局をはなれているものは、出身部局を選択してください)
- (4) 職位 助教、 講師、 准教授、 教授
- (5) 授業科目数 1～5科目/年、 6～10科目/年、 11～15科目/年、
16～20科目/年、 20科目以上

2. あなたが担当している授業について、授業の受講以外に想定している学修時間（1科目当たり）は平均どれくらいですか。担当科目全体の大まかな目安として、当てはまるものに☑をしてください。

- (1) 講義科目 30分以内、 30分～1時間、 1～2時間、 2～3時間、 3時間以上
- (2) 演習科目 30分以内、 30分～1時間、 1～2時間、 2～3時間、 3時間以上
- (3) 実習科目 30分以内、 30分～1時間、 1～2時間、 2～3時間、 3時間以上

3. 学生の学修時間の現状に対する教員の問題意識に関する質問です。当てはまるものに☑をしてください。

- (1) あなたの授業を受講している学生の学修時間は十分だと思いますか。
強くそう思う、 そう思う、 どちらともいえない、 そう思わない、
まったくそう思わない

コメントがあればお書きください（自由記述）

(2) 大学として組織的に学生の学修時間を増やすため取り組みが必要だと思いますか。

- 強くそう思う、 そう思う、 どちらともいえない、 そう思わない、
まったくそう思わない

コメントがあればお書きください（自由記述）

4. あなたが担当している授業の予習・復習に関する質問です。当てはまるものに☑をしてください。

- (1) あなたの授業では、学生が予習してくることを前提に授業を構成していますか。
いつもそうしている、 そうしていることが多い、 どちらともいえない、
あまりしていない、 まったくしていない

コメントがあればお書きください（自由記述）

(2) あなたの授業では、予習してこない学生も参加できるような授業の構成にしていますか。

- いつもそうしている、 そうしていることが多い、 どちらともいえない、
あまりしていない、 まったくしていない

コメントがあればお書きください（自由記述）

(3) あなたの授業では、学生が復習することを前提に授業を構成していますか。

- いつもそうしている、 そうしていることが多い、 どちらともいえない、
あまりしていない、 まったくしていない

コメントがあればお書きください (自由記述)

(4) あなたの授業では、復習してこない学生も授業に参加できるような授業の構成にしていますか。

- いつもそうしている、 そうしていることが多い、 どちらともいえない、
あまりしていない、 まったくしていない

コメントがあればお書きください (自由記述)

5. あなたの授業を受講する学生の学修時間を増やすために行っていることはなんですか。(複数回答可)

(意識)

- 学修時間を増やす方策について、特に意識したことはない。
学修時間を増やす方策について、意識はしているが、具体的なことは行っていない。
学修時間を増やす方策について、意識はしており、具体的な方策を実施している。

(シラバス)

- シラバスに自主学習課題を記載している。
シラバスに自主学習課題を行うのに必要な時間の目安を記載している。

(授業の予習・復習)

- 毎回の授業で、予習・復習をするよう口頭で促しているが、課題は課していない。
毎回の授業で、予習・復習に関する課題を課している。

課題を課している場合

- 指示した課題をやってきたかどうか、確認していない。
指示した課題をやってきたかどうか、授業中にノートを見るなどして確認しているが、成績評価には加えていない。
指示した課題をやってきたかどうか、授業中に小テストなどをして成績評価に加えている。
指示した課題について、レポート、ノート、ポートフォリオなどを提出させているが、成績評価には加えていない。
指示した課題について、レポート、ノート、ポートフォリオなどを提出させて成績評価には加えている。

(主体的学習の促進)

- オフィスアワーを提示している。
YPUポータルを通じて学生の書き込みに積極的に応じている。
YPUポータル、「Moodle (ムードル)」などICTを活用した自主学習の支援を行っている。
予習・復習にとどまらず、興味・関心を広げるため自主学習課題を提供している。

(グループ学習の促進)

- グループで調べるなど、学生同士の授業時間外の活動を促進している。
学生が自主的なグループ活動を行う場所・時間を提供している。
学生のグループ活動に、教員も積極的に関与し、自主的活動を支援している。
グループ活動の成果について、振り返りの時間を持つよう指導している。

その他、実践していることがありましたらお書きください (自由記述)

6. あなたの授業を受講している学生の学修時間を増やす工夫で効果をあげているものをお書きください。(自由記述)